

岩井堂洞窟における 早期貝殻沈線文土器の系統と変遷

石川 恵美子*

I はじめに

岩井堂洞窟遺跡は、昭和37年に発見され、昭和38年より昭和51年までの間に第8次に及ぶ調査が、山下孫継氏を中心に進められた。

遺跡からは、縄文時代早期の押型文土器、貝殻沈線文土器、縄文条痕土器が重層して多数出土し、秋田県下のみならず全国的に注目される遺跡となった。昭和53年9月18日には、国の重要史跡の指定を受けている。

この度、当館の、「地域展—湯沢・雄勝の文物展」の展示に際し、本遺跡出土の土器群を観察する機会を得ることとなったが、その際本遺跡の資料が昨今さかんに話題となっている貝殻沈線文土器の層位的出土例として好資料であることを確認するに至った。

本遺跡の土器については、山下孫継氏がその報文⁽¹⁾の中で、すでに詳しく述べられているが、本論では近年の当該期の資料の増加と編年作業の進展を鑑み、本遺跡の貝殻沈線文土器を概観した後でより細かな視点にたった編年的位置付けと評価を試みたいと思う。

尚、本遺跡の資料は雄勝町教育委員会が保管しているが、時間的制約上、資料の図化がかなわなかったので、本論では山下氏による報文より図版を再編集している。その点はどうかご寛容願いたい。また、遺跡についての詳細についても山下氏の報文を御参照いただければ幸いである。

II 岩井堂洞窟の層序

岩井堂洞窟の中で最も調査面積が広く遺物量の多いのが第4洞穴であり、その層序と主な出土遺物を第1図に示した。遺物包含層は第2・3・5・7・9・11層であり、縄文時代早期に属するのは、第5層以下である。

第5層以下は、岩盤崩落によると思われる無遺物層が比較的厚く概ね良好な堆積状況を呈しているといえる。

本論では、第4洞穴第9層と第11層出土の貝殻沈線文土器を中心に扱っている。

III 岩井堂洞窟出土の貝殻沈線文土器

ここでは、各層における主な土器をとりあげて、それを分類した。分類にあたっては、多くが破片資料であることから文様の構成要素に基づいて大別し、さらにモチーフと文様表出技法の違いからそれを細分した。文様帯構成のわかるものについてはそれについても説明している。

(1) 第11層出土土器

① 第1群土器

沈線文と押引文によって構成されるものを1群とし、さらに押引きに用いた施文工具の違いから3細分した。

a類：(第2図1)口縁部を大きく欠失しているが、頸部がくびれて口縁部が外反し、胴部及び底部は砲弾形を呈している。文様帯はくびれた口頸部で口縁部文様帯と胴部文様帯に分帯されている。器面には全面に横方向の貝殻条痕調整がなされ、口縁部にはL字状のモチーフが、胴部には帯状に連続する菱形のモチーフが2本1単位の太い平行沈線によって2段にわたって描かれている。さらに、モチーフの線に沿って、ペン先状工具による押引文が付加される。

b類：(第2図2～4)やや幅が広く、先端部が楔状を呈する工具による押引文である。

c類：(第2図5～7)2本1単位の沈線でモチーフを描き、その中をへら状工具の押引文で充填するものである。モチーフは概ね直線的であり、それが山形

* 秋田県立博物館

に交差するものもある。

② 第2群土器

沈線文と刺突文によって構成されるものを2群とし、モチーフの違いからさらに2細分した。

a類：(第2図8~10)口唇部直下より縦位の刻目が入り、その下に格子目状に沈線でモチーフが描かれる。格子目状モチーフ下には縦位の刺突文が一行巡る。

b類：(第2図11~14)横位の一行の刺突文を区画文として、その間に2本1単位の沈線でモチーフを描く。モチーフは縦に垂下する沈線とそれに斜交する沈線の線が綾杉状に相対する形で描かれる。

③ 第3群土器

刺突文と貝殻文によって構成されるものを3群とし、モチーフと文様表出技法の違いからさらに3細分した。

a類：(第3図1)口唇部直下に横位の刺突文が一行巡り、さらに胴上半部にも一行同様な刺突文が巡る。この刺突文は区画文であり、その間には貝殻腹縁圧痕文による綾杉状の文様と、それが崩れた矢羽状の文様が施文される。胴下半部は概ね貝殻腹縁圧痕文による矢羽状の文様でおおわれている。

b類：(第3図3・4)2列1単位の刺突文で文様帯を区画し、その間に貝殻腹縁圧痕文を施す。爪形文には、形態の違いが認められる。

c類：(第3図2・5)1列の刺突文で文様帯を区画し、区画内に貝殻腹縁圧痕文または貝殻表による連続刺突文を描く。下端の刺突文からは、縦方向の貝殻条痕文が施されるものもある。口唇部直下に貝殻腹縁文を施文し、狭い文様帯を有する点で、a・b類とは異なる。

④ 第4群土器

刺突文と沈線文と貝殻文で構成されるものを4群とし、モチーフ及び文様表出技法の違いからさらに4細分した。

a類：(第3図6)器面が貝殻条痕で調整され、その上にモチーフが描かれる。粘土のめくれあがるような刺突文(突瘤文)が口唇部直下に2列巡る。胴部破片にも同様な刺突文がみられることから、この突瘤文は区画文と考えられる。区画内には、沈線で綾杉状のモチーフが描かれる。

b類：(第4図1)文様帯の構成は第3図2と全く同じであるが、下端の刺突文からは、3本1単位の沈

線が縦に垂下する。

c類：(第4図2)一本の沈線により明瞭に口縁部文様帯を区画し、貝殻腹縁を押引して施文している。また、胴上半部もやはり沈線で区画して区画内では刺突文によってモチーフが描かれている。刺突は上端・下端にそれぞれ3列ずつ施文され、それに斜交する形で、一行の刺突文が施される。そしてさらに、モチーフの間の空間が、貝殻腹縁圧痕文で充填される。

d類：(第4図3・4)数本の平行沈線で文様帯の上端と下端を区画し、その中に縦区画あるいは斜交するモチーフが描かれる。モチーフ間は、棒状工具による刺突及び貝殻腹縁圧痕文で充填される。

(2) 第9層出土土器

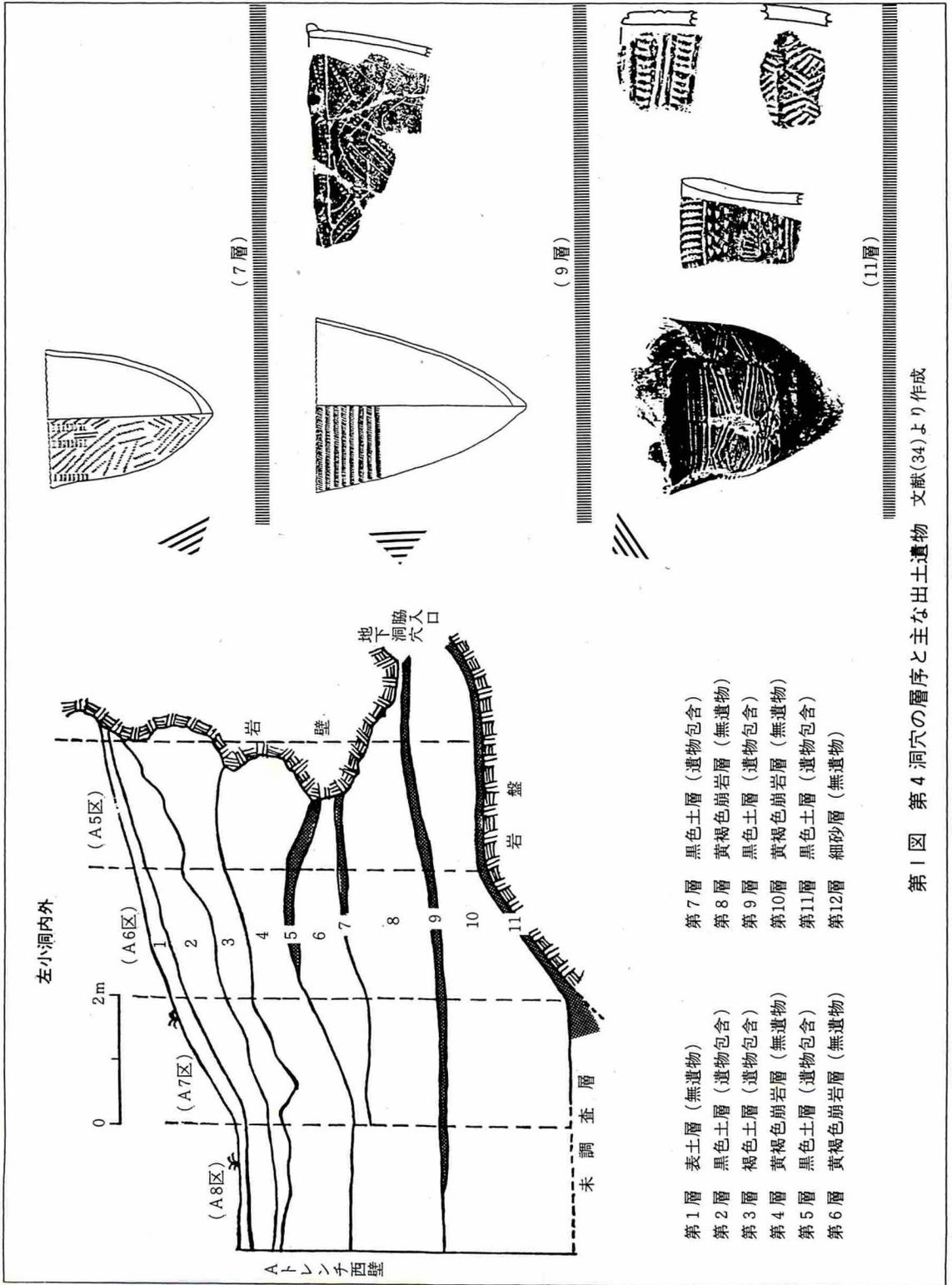
① 第5群土器

沈線文と貝殻文によって構成されるものを5群とし、モチーフ及び文様表出技法の違いからさらに3細分した。

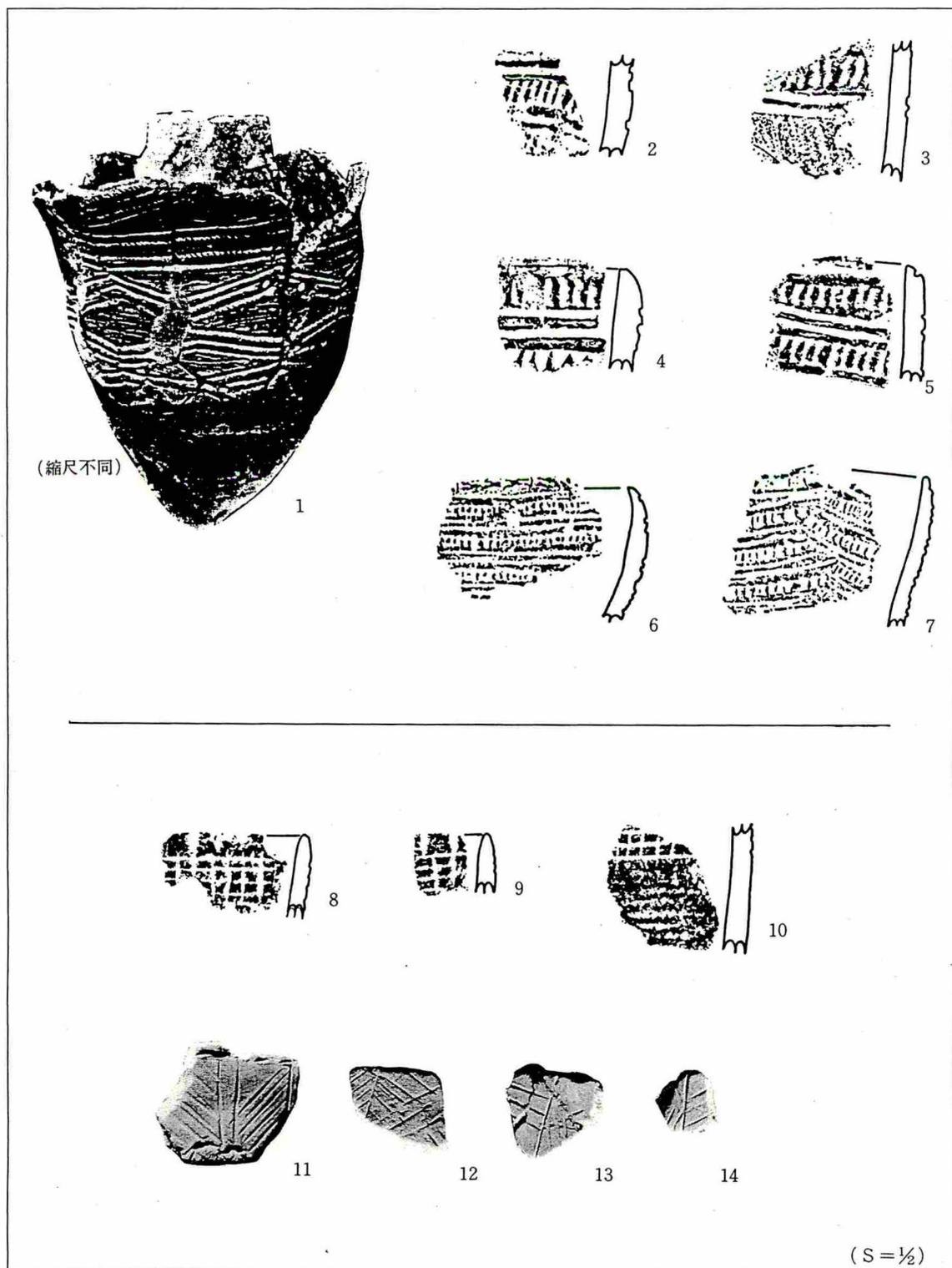
a類：(第4図5・6・8)一本の沈線で区画された口縁部文様帯と胴部文様帯で構成される。口縁部文様帯では、貝殻腹縁圧痕文がやや間隔をおいて施され、貼瘤もなされる。胴部文様帯では、沈線で連続山形文が重層して描かれ、屈曲部分には棒状工具による刺突文が施文される。また、モチーフの描線に沿って、貝殻腹縁圧痕文が施文される。胴下半部は無文帯となっている。

b類：(第4図7)一本の沈線で区画された口縁部文様帯と胴部文様帯によって構成される。胴部文様帯と胴部無文帯の境界では、器形にわずかながらも屈曲がみられる。胴部文様帯では、貝殻腹縁圧痕文を施文した後に、平行沈線で山形のモチーフが描かれる。また、胴部文様帯と無文帯の区画文として、1本の波線をはさんだ平行沈線が描かれる。

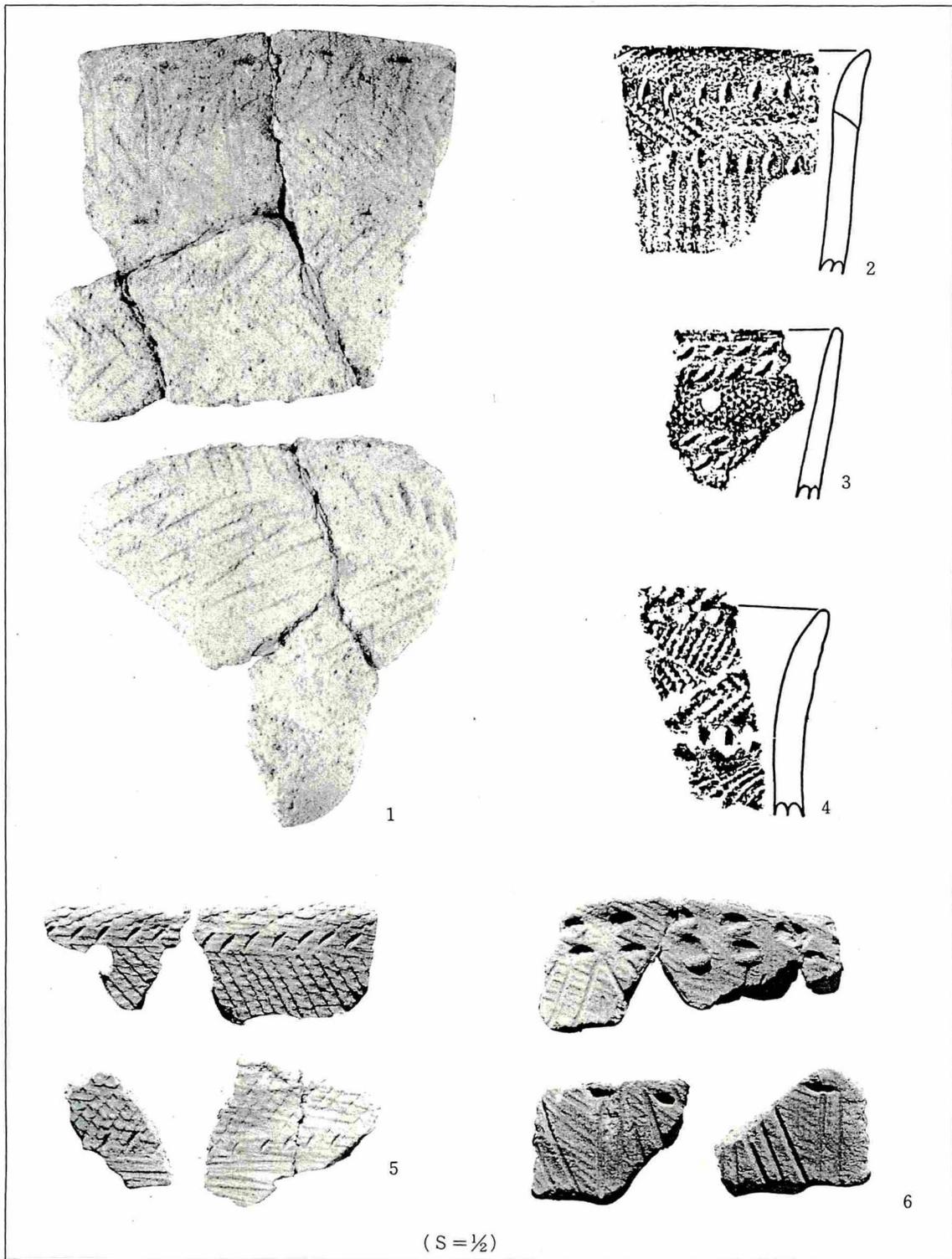
c類：(第5図1~4)口縁部文様帯と胴部文様帯によって構成される。口唇部は平坦で一本の沈線が巡っている。口縁部文様帯と胴部文様帯の区画文として平行沈線で波線が描かれる。器面に貝殻腹縁圧痕文を施した後に、平行沈線でモチーフを描いている。モチーフには多少バリエーションがあり、1は口縁部の区画文より直線的な沈線と波形の沈線が垂下し、口縁の波頭部下においてそれが斜交するものである。斜交する交点には刺突文も施される。2では方形に区画した



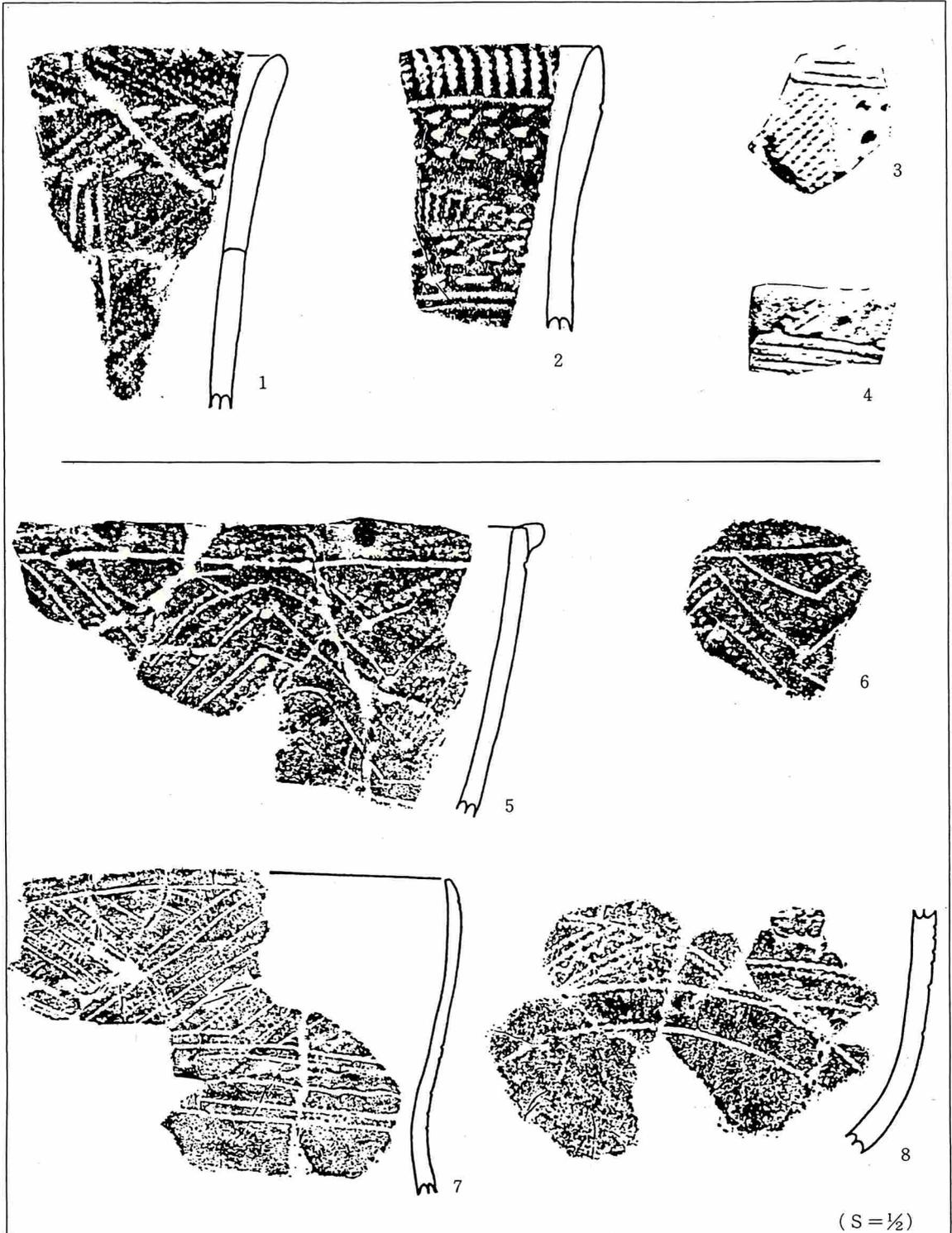
第1図 第4洞穴の層序と主な出土遺物 文献(34)より作成



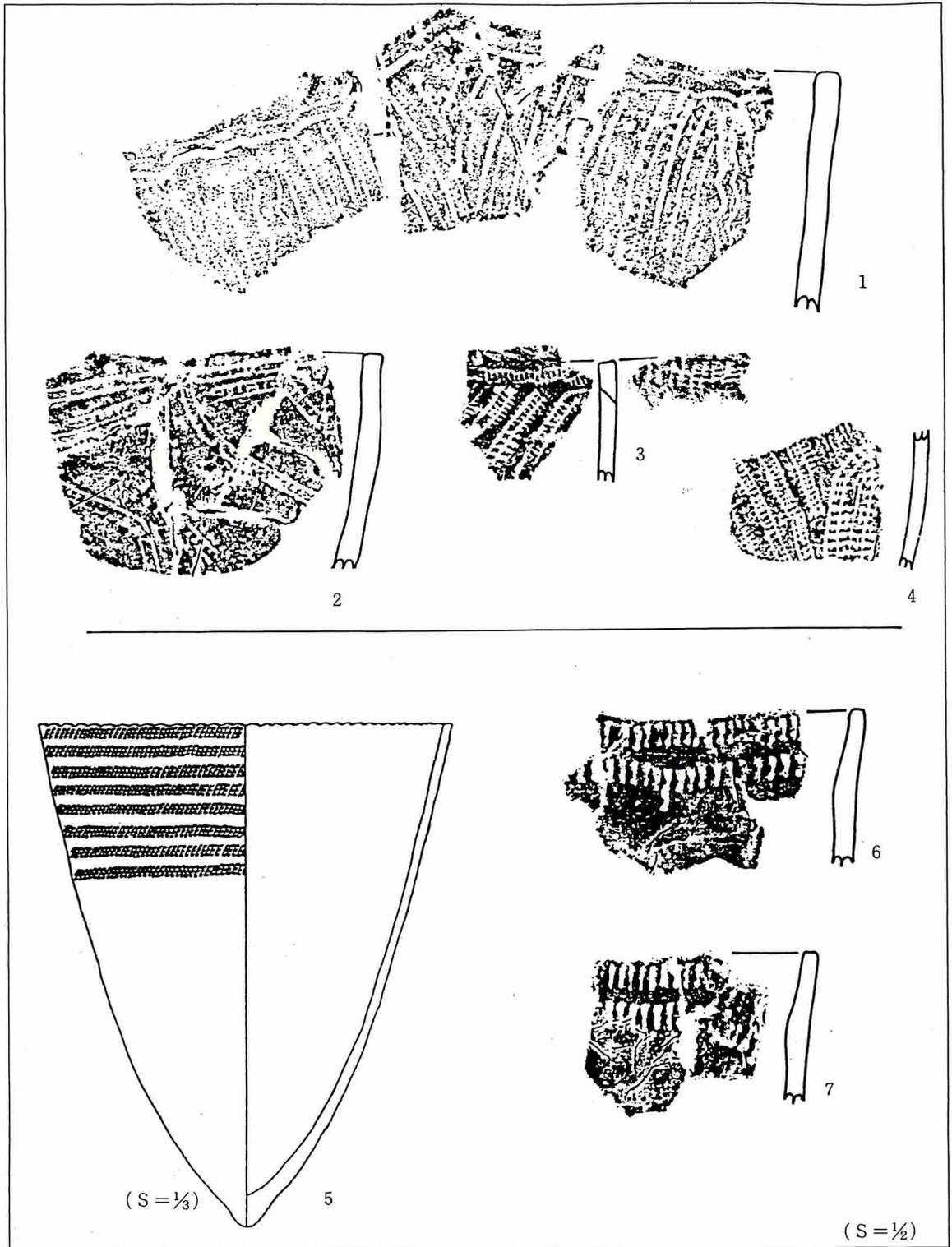
第2図 岩井堂洞窟出土土器 (I)



第3図 岩井堂洞窟出土土器 (2)



第4図 岩井堂洞窟出土土器 (3)



第5図 岩井堂洞窟出土土器 (4)

モチーフが連続して描かれている。また、口縁部内部に、1では貝殻腹縁圧痕文が、3では、貝殻腹縁押し文が施文されている。

②第6群土器（第5図5～7）

口縁部に集約して縦位の貝殻腹縁圧痕文を施文した土器である。5では、8段にわたって施文されている。口唇部には刻目が入り、小波状を呈する。6・7は2段の貝殻腹縁圧痕文が施されたもので、口縁部はゆるく波状を呈するようである。

IV 東北地方における貝殻沈線文土器の変遷

ここでは、前章でみてきた各層出土土器の編年的な位置付けを行うために、東北地方における貝殻沈線文土器の変遷を明らかにする。

東北地方における貝殻沈線文土器の編年については、吹切沢式と物見台式をめぐって、両者を系統的に異なるものとみる名久井案⁽²⁾と、一系統の中での時間差とみる三宅案⁽³⁾で、編年観の対立がみられたが、さらに吹切沢式の編年的位置付けに関して、前二者とはまた見解を異にする西川案⁽⁴⁾が出されたことにより、状況はより混沌としてきた感をうける。

ここでは、土器の文様帯構成（器形）とモチーフ及び文様表出技法（とくに貝殻文）の違いから、砲弾形の器形を呈し、口縁部に集約された文様帯をもち、貝殻文を多用して文様を描く「吹切沢式系統」と、キャリパー形の器形を呈し、沈線で主文様である渦巻文や入組文を数段にわたって描き、それを貝殻文で充填する「物見台式系統」という2系統に土器を大別し、各々の変遷をたどることとした。結果的には名久井氏の最新の編年案⁽⁵⁾に準ずるところとなったが、それを導き出す方法において名久井氏とは若干異なっている。

(1) 分析の概念と方法

土器型式における構造は、器形と文様及びその割りつけという個々の要素を有機的に捉えることによって理解される⁽⁶⁾。つまり、器形に準じて文様帯は構成され、文様帯の内部では文様が帯状に展開するわけであり、土器型式の変化をたどる場合には、これらの構造的な変化に目を向ける必要がある。

そこで、ここでは文様帯の構成とその内部で展開する図形としてのモチーフ及び文様表出技法という要素に着目して、先に述べた2系統において各々の土器の

連続的な変化と変化の画期について述べていきたいと思う。

尚、各系統において文様帯構成を示す上で文様帯に記号を与えてあるが、これはあくまでも各系統内における詳細な変遷をたどるためのものであり、山内氏による縄文土器の全体を見通す文様帯の記号とは異なるものであることをあらかじめ断っておきたい。

(2) 「吹切沢式系統」における変遷

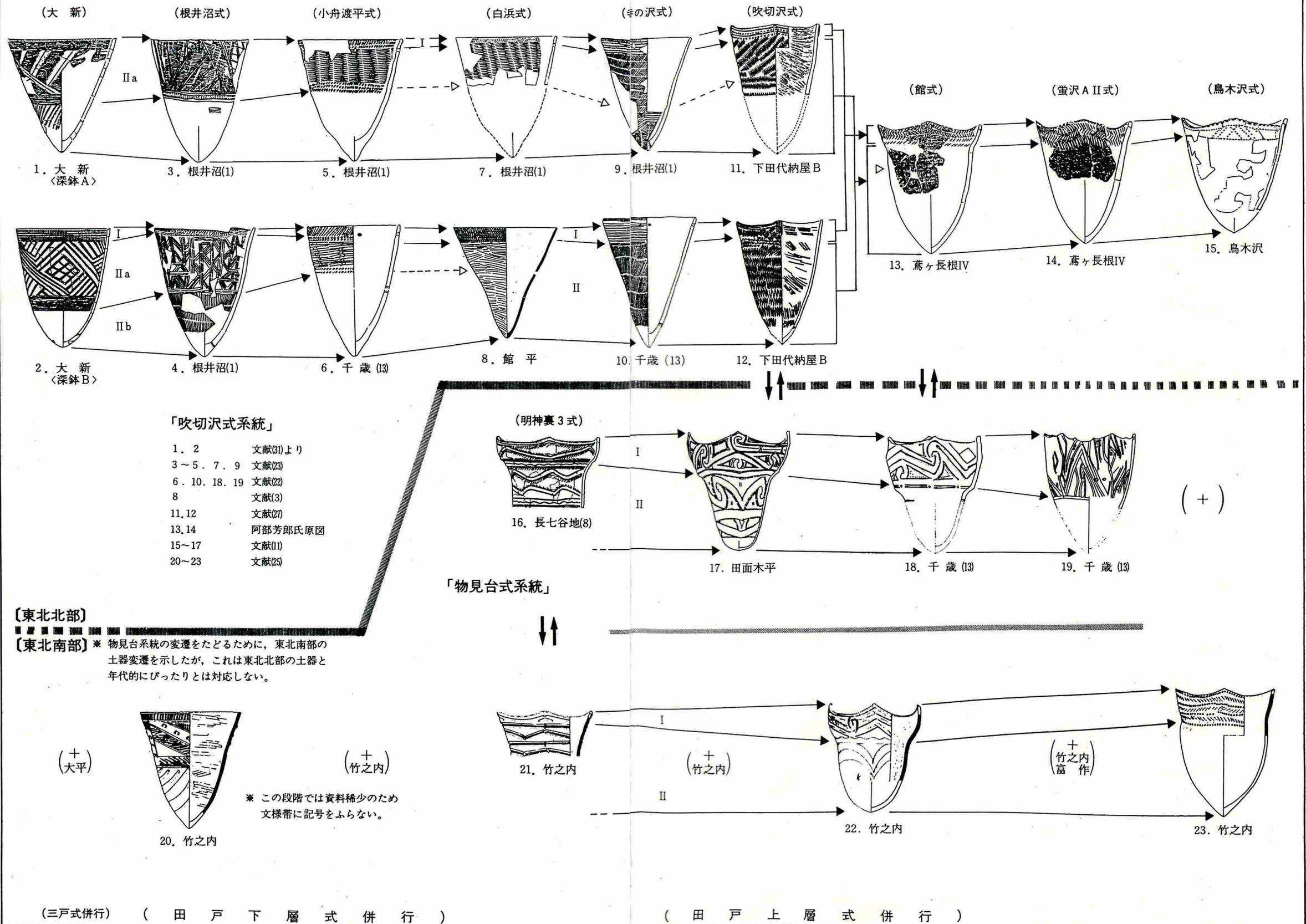
「吹切沢式系統」におけるおおよそその変遷は、第6図に示したとおりである。「吹切沢式系統」は、その系譜を押型文土器に続く沈線文土器に求め得ることから、（大新）→根井沼式⁽⁷⁾→小舟渡平式⁽⁸⁾→白浜式⁽⁹⁾→寺の沢式⁽¹⁰⁾→吹切沢式⁽¹¹⁾→館式⁽¹²⁾→蛭沢AⅡ式⁽¹³⁾→鳥木沢式⁽¹⁴⁾という変遷を予測した。型式名については、土器の変遷をたどった段階で該当すると思われる型式名を付与したが、細部において若干の齟齬はある⁽¹⁵⁾。

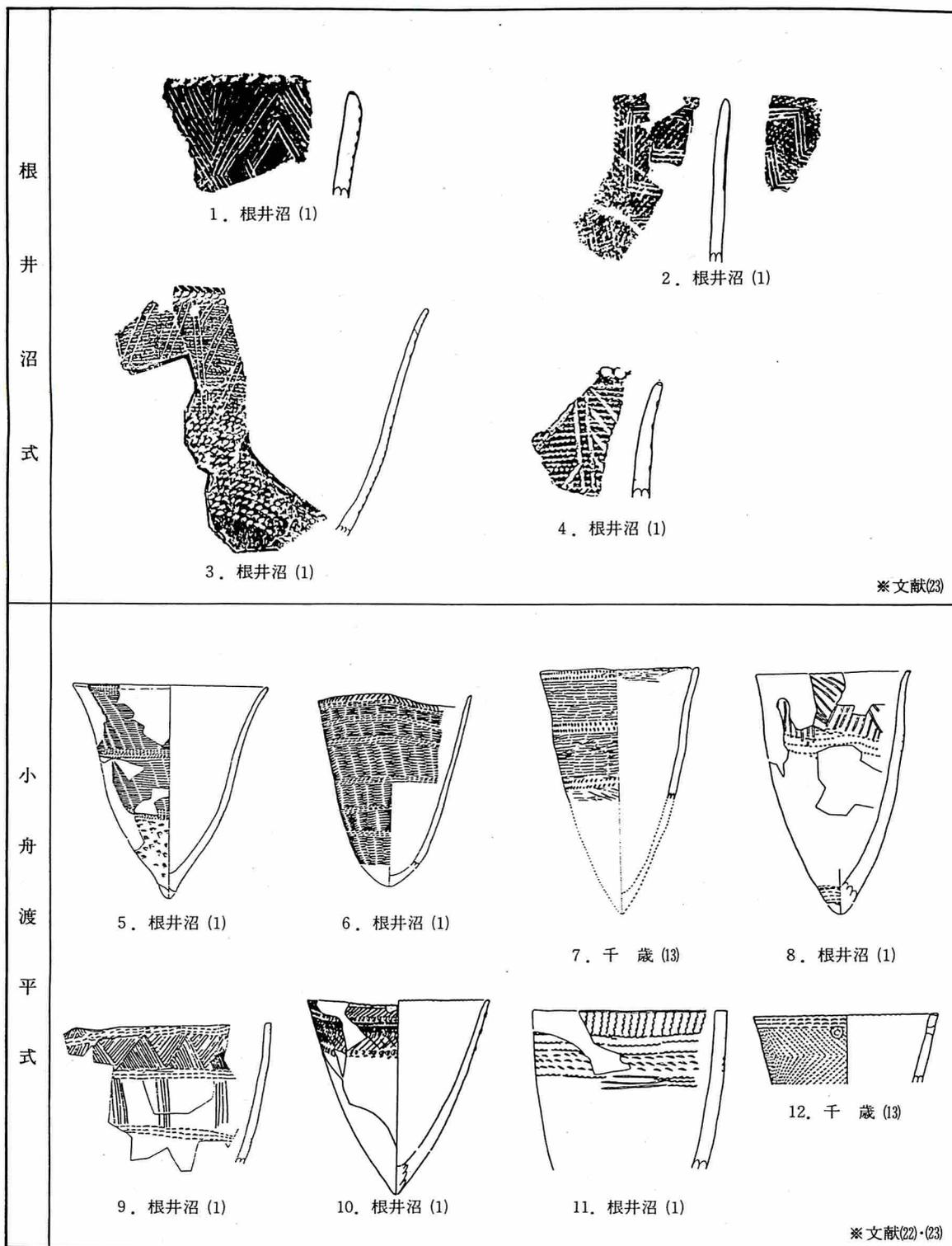
以下先に示した方法に基づき、説明を行いたい。

① 文様帯構成

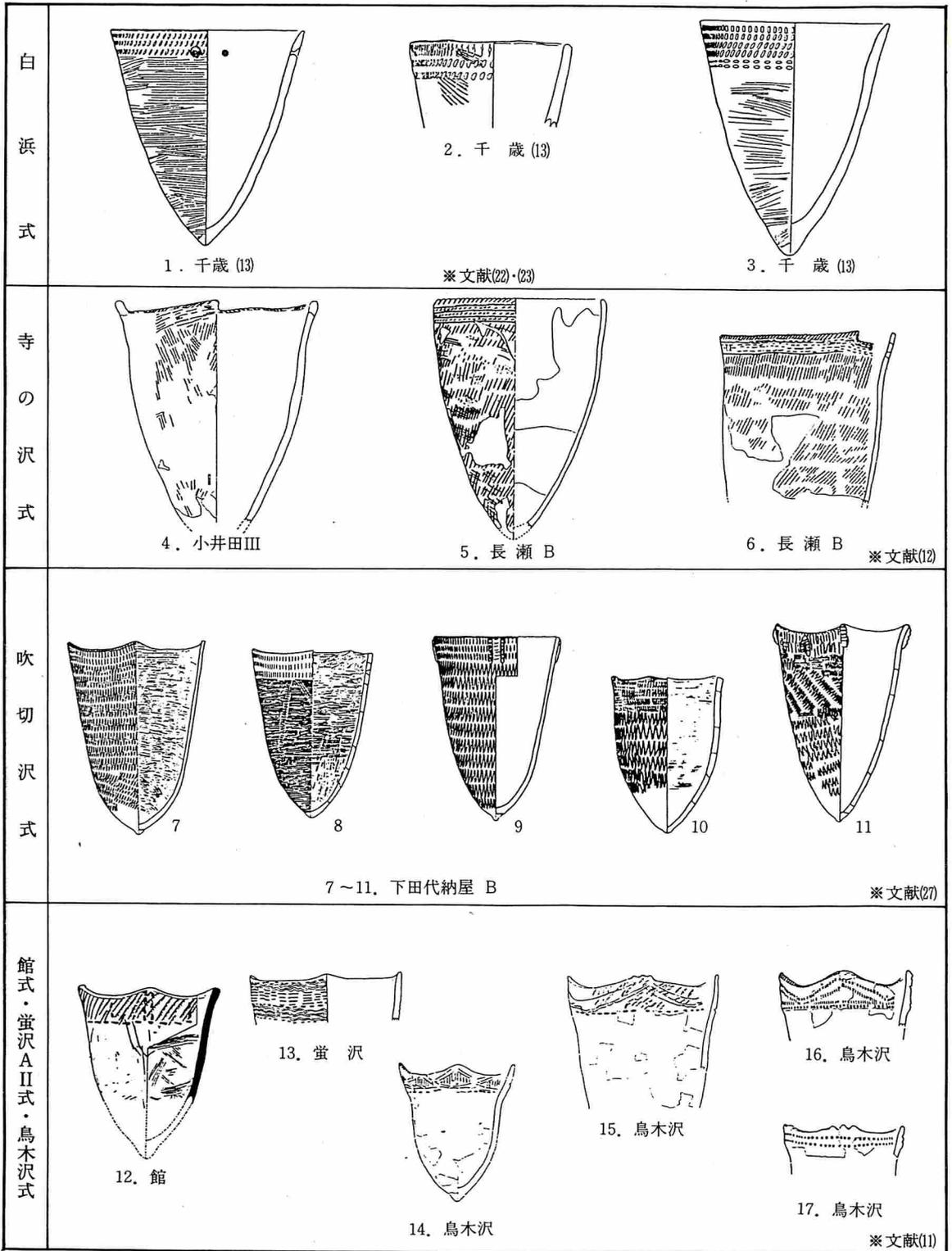
文様帯構成を考える上では、大新町遺跡の2形態の深鉢A・B（第6図1・2 以下第6図省略）を祖型とみなした。深鉢Aは、数本の平行沈線に区画され主文様の描かれる胴上半のⅡa帯と単純な沈線のみで描かれる胴下半部のⅡb帯によって構成され、深鉢Bは、口縁部のⅠ帯と、主文様の描かれる胴上半のⅡa帯及び無文帯であるⅡb帯によって構成される。この2形態は、根井沼式、小舟渡平式を通じて存続するが、各文様帯を分帯する区画文には変化がみられる。大新では、数本の平行沈線であった区画文が、根井沼式、小舟渡平式では2～3段の刺突列がそれにおきかわっている。(3)では、数本の沈線の間に2段の刺突列が巡ることによって区画文が構成されている。区画文が平行沈線から刺突列におきかわる中間の様相を示しているといえよう。また、貝殻腹縁圧痕文が区画文となるもの(4)もある。

文様帯構成の上で変化が著しいのは、次の白浜式といえる。深鉢Aにおいては、Ⅱa帯の下端を区画していた刺突文の消失によって、Ⅱa帯とⅡb帯の分帯が不明瞭となる。さらに、区画文として意味のなくなったⅡa帯の上端の刺突文が新たにⅠ文様帯を形成する。深鉢Bにおいても、やはりⅡa帯の下端の区画文が消失することによって、Ⅱa帯は拡幅してⅡ帯へと変化し





第7図 各型式土器群 (I) (縮尺不同)



第 8 図 各型式土器群 (2) (縮尺不同)

II帯全面に貝殻条痕文が施文される。I帯では、先行する貝殻腹縁圧痕文に、IIa帯の上端を区画していた刺突文が付随する。この白浜式の段階では、IIa帯下端の区画文が消失することによって主文様がI帯へと集約されることに大きな特徴がある。しかし、この変化は、小舟渡平式におけるIIa帯の狭小化からくる漸移的なものであったであろう。また、IIb帯においては根井沼式では貝殻腹縁による押引文(3)あるいは圧痕文(4)が底部近くにまで及ぶが、それが小舟渡平式で無文化し、白浜式では貝殻条痕文(8)に変化している。

寺の沢式以降も、深鉢A・Bの2形態は存続するが、分帯線はI帯とII帯においても不明瞭となる。寺の沢式の深鉢AではI帯とIIa帯及びIIb帯の分帯を、貝殻腹縁圧痕文の方向を変えることによって行っている。また深鉢BでもI帯では横位の貝殻腹縁圧痕文をII帯では斜位の貝殻腹縁圧痕文を施すことによって分帯している。吹切沢式に至っては、沈線でI帯とII帯の分帯を行う例(11・12)もあるが、第8図7~11に示したように文様表出技法を変えることによって分帯されているものもある。しかし、吹切沢式ではその特徴である口唇部から垂下する隆帯がI文様帯の幅とほぼ等しく付加されており、文様表出技法の違いと共にI・II帯の分帯に関わっている。吹切沢式における隆帯の系譜は、根井沼式に求めることができよう。(3)に示した個体では4単位の隆帯がすでに認められる。しかし、吹切沢式では、4単位の波状口縁が顕著となり隆帯はその波頭部から垂下して縦の区画線となる点では根井沼式とは異なっている。また、根井沼式と吹切沢式の間には3型式が介在しており、この隆帯の系譜については他系統の影響も考慮する必要がある。

口縁部形状については、根井沼式、小舟渡平式、寺の沢式では平縁の他に不均整な波状口縁をもつものがみられたが、吹切沢式ではそれが先にも述べたように4単位の波状口縁へと変化している。

後続する館式では、この4単位の波状口縁を継承し、隆帯から沈線へと変化はするものの波頭部下における縦区画もそのまま存続しI帯をつくる。しかし、文様帯構成上、大きな変化がここで認められる。それは、口縁部が大きく外反するキャリパー形を呈してI帯となることで、これには併行関係にある「物見台式系統」が関与したと考えられる。またI・II帯の分帯が明ら

かになると共に、IIa・IIb帯の分帯はなくなり、この段階では一形態の深鉢へと融合化する。しかしながら(13)ではII帯は貝殻条痕とナデによって調整されており、わずかに分帯の痕跡をとどめている⁹⁹。

蛸沢AⅡ式、鳥木沢式でも、文様帯構成は館式と同様であるが鳥木沢式に至っては口唇部の屈曲が緩やかになり、器形もずんぐりとしたものになる。また口縁部形状は、蛸沢AⅡ式でやや緩やかな波状口縁となり鳥木沢式では副突起を有するものもみられる。II帯においては鳥木沢式において無文化する。

最後に、口唇部の特徴であるが、根井沼式ですでに絡条体圧痕文が認められ、鳥木沢式に至るまで口唇部には刻目もしくは絡条体圧痕文が連綿と保持されていたことがわかる。

⑤ モチーフ及び文様表出技法

文様表出技法においては、沈線文土器である大新と貝殻文を多用する根井沼式以降では当然のことながらそこに大きな画期が存在する。しかしモチーフについてみると、(1)にみられる3本1単位の太い沈線によるY字状モチーフは、(3)においても、沈線間の間隔を狭めてはいるものの継承されていることから、モチーフは文様表出技法の転換にかかわらず連続していたことがわかる。ただし、(1)ではモチーフ間の空白部を格子目状の細沈線で充填するが、(3)では、全面に貝殻腹縁による押引文あるいは圧痕文を地文とし、その上に沈線でモチーフを描くという施文順序の逆転が認められる。また、(4)では、3本1単位の貝殻腹縁圧痕によってモチーフが描かれる。これは先行する(2)のモチーフを直接的に継承するものではないが、带状格子目文が貝殻文に置きかわったものと考えられる。この個体では、区画文も貝殻文に変化していることから、(3)のように沈線の要素をとどめずすべてが貝殻文に転換した例と考えられる。したがって文様表出技法の転換期にある根井沼式の段階では、貝殻文を地文として沈線で先行型式を継承するモチーフを描くものと、貝殻文のみでモチーフを描くものがあることがわかる。

小舟渡平式では、根井沼式においてみられたモチーフが消失して地文であった貝殻腹縁圧痕文だけが残るもの(5)と、貝殻腹縁圧痕文を地文として刺突文が先行型式の縦区画だけを描くもの(6)とがある。また地文をもたずに沈線だけで文様を描くもの(第7図8・9)

もみられる。いずれも、文様は簡略化されているのであるが、その反面文様が多段化して全面に貝殻文を施文するもの(第7図5~7)もある。(6)ではI帯においても刺突文が貝殻腹縁圧痕文へと変化しており、この段階で貝殻腹縁圧痕文が文様表出技法の主体となったといえる。

これに続く白浜式では、文様帯構成の上では変化しているが、文様表出技法においては先行型式の貝殻腹縁圧痕文をそのまま残している。ただし、独立した文様として残存した刺突文は、粘土瘤がめくれあがる突瘤文へと変化し、より強調された表現となっている。

寺の沢式、吹切沢式では貝殻腹縁圧痕文の手法が先行型式から変化している。文様帯の分帯にあたって貝殻腹縁圧痕の方向を変えることは先に述べたとおりであるが、寺の沢式においては、II帯で斜位の貝殻腹縁圧痕文が盛行し、吹切沢式では、貝殻腹縁連続波状圧痕文が盛行する。また、これらの段階で重要な点はI帯とII帯で使用する施文原体が異なる点である。同じ貝殻腹縁文でも、(9)のようにI帯に残る貝殻腹縁の長さがII帯のそれよりも短かくI帯では截断された貝殻が施文原体として使われたと考えられるものや、⁰ⁿI帯に竹管系工具で押引文を施したりへう状工具で刻みを入れる施文工具の異なるものもある。こうした傾向は吹切沢式でより顕著に認められ、施文工具に基づく文様表出技法の違いがI・II帯の分帯をより明瞭にしている。

館式では、吹切沢式の隆帯が沈線に置きかわるが、この縦区画の連続はスムーズである。また、I帯では矢羽状の貝殻腹縁圧痕文が施文されるが、それを区画する沈線文も吹切沢式からの連続といえる。蛭沢AII式では、矢羽状の貝殻腹縁圧痕文がそのまま連続するが、区画文は沈線文から刺突文へと変化している。

鳥木沢式では、刺突文を多用してモチーフを描くようになり、貝殻文が文様の主体ではなく充填文として用いられるようになる。しかし、モチーフの中心が波状口縁の波頭部下にある点では、館式の要素をとどめているといえる。

以上が「吹切沢式系統」における変遷であるが、大略を述べるならば文様帯構成上では、小舟渡平式から白浜式の間と、吹切沢式から館式の間に変化の画期が認められた。前者の変化は「吹切沢式系統」の内部に

おける変化であり、後者の変化は「物見台式系統」の影響という外的な要素に起因する変化であったと思われる。また、モチーフにおいては、沈線文から貝殻文へと文様表出技法が転換するにもかかわらず先行する土器に連続し、その後は文様の簡略化と口縁部への集約化が認められた。文様及び文様表出技法の変化は概ね「吹切沢式系統」の中での変化として捉えられるが、吹切沢式にみられる波状口縁と波頭部の下に垂下する縦区画には「物見台式系統」の影響も少なからず考えられ、器形の変化に伴うモチーフの変化がここでひき起こされている。

(3) 「物見台式系統」における変遷

「物見台式系統」の祖型は田戸上層式の最初頭に併行して東北に広範に分布する明神裏3式⁰ⁿに求めた。明神裏3式は、林氏によると「広義の田戸上層式の一分派」であることから、その祖源は東北南部及び関東地方に求めることができよう。この明神裏3式に続く土器の変遷も第6図に示している。ここでは明神裏3式を除いて型式名は付与していない。

㊤ 文様帯構成

明神裏3式に該当するのは(16)であるが、これは、口頸部に屈曲をもち、口縁部が外反するキャリパー形の器形を呈する。口縁部形態は4単位の波状口縁となっている。文様帯は、口縁部文様帯と胴部文様帯からなっておりそれぞれI帯・II帯とする。分帯の目安となる区画文は口頸部の屈曲部分に巡る沈線であり、I・II帯からなる文様帯構成とこの区画文は、「物見台式系統」の終末まで連続する。

これに続く(17)では、I帯においてはよりキャリパー形が強調され、I帯の幅が広くなり、II帯では文様が多段化して器面のほぼ全面が文様で覆われるようになる。しかし、(18)では、装飾の中心がI帯だけに移動してII帯は無文化するという変化がみられる。また、これに伴いI帯の幅が胴部中央にまで及び、屈曲はやや緩やかになる。波状口縁の波頭部も小さくなる。後続する(19)では、胴部の屈曲が全くなり、砲弾形を呈するようになる。この器形の変化には、「吹切沢式系統」が関与していると思われる。また、口縁部は波頭部に副突起をもつ波状口縁となる。(19)の段階では口縁部の内面にも施文される特徴がある。

㊦ モチーフ及び文様表出技法

明神裏3式(16)では、棒状工具による押し引きでI帯にはL字状のモチーフが、II帯には帯状に展開する菱形のモチーフが描かれる。そして、この描線に沿って、貝殻腹縁圧痕文が充填される。これが、次の段階になると、I帯では波状口縁の波頭部下に文様の割りつけの基準ができて、より複雑なモチーフが描かれるようになる。また、I帯とII帯では文様表出技法に違いが認められるようになる。しかし、モチーフの描線に沿って充填する貝殻腹縁圧痕文はI・II帯とも共通しており、前段階より連続するものである。(17)では、波頭部直下に渦巻文が描かれその下には入組文が展開する。モチーフは、ペン先状工具による押し引きで描かれ、モチーフの屈曲及び末端には刺突文が施される。一方、II帯では、入組文が2段にわたって沈線で描かれている。後続する段階では(18)にみるように、I帯では先行型式同様、波状口縁の波頭部下に沈線で渦巻文が描かれ、その描線がさらにのびて山形のモチーフとなる文様は総じて簡略化されており、貝殻腹縁圧痕文による充填文もわずかに認められるだけである。しかし、モチーフの屈曲及び末端には、刺突文の他に小さな粘土瘤を貼りつけるという新しい要素もみられる。次の段階(19)では、貝殻腹縁圧痕文による充填文がなくなり、地文として貝殻条痕文が施される。その上に平行沈線でモチーフは描かれるが、モチーフは前段階でみられた渦巻文からのびる山形のモチーフがそのまま残り、渦巻文は波頭部下または山形のモチーフの中に半円を描く形となって残る。モチーフの末端及び屈曲における刺突文と粘土瘤はそのまま連続している。また、この段階で口縁部内面には、貝殻腹縁圧痕文が施文されるようになる。

「物見台式系統」の変遷を概観するならば、文様帯構成上は、I帯が拡幅して胴部中央まで広がり、それと共に屈曲が消失し、II帯も無文化するという変化が認められる。また、モチーフ及び文様表出技法においては、明神裏3式に後続する段階で文様の割りつけが定まり、文様も闊達となるが、それ以降はI帯の拡幅に伴って文様は簡略化し、貝殻文の用法も充填文から地文へと変化する。

「物見台式系統」における変遷は内部的な変化であるが、その終末において器形の上で「吹切沢式」の影響が感じられる。

V 岩井堂洞窟出土土器の編年的位置付けと評価

(1) 各層出土土器の系統と変遷

岩井堂洞窟の各群土器は、前章でみてきた系統と変遷において次のように比定できる。

第1群土器a類は明神裏3式(第6図16)にあたる。b・c類はこれに若干先行して田戸下層式と明神裏3式との中間の様相を示すことが指摘されている。⁽¹⁸⁾第2群土器a類は本論では示し得なかったが、蛇王洞II式に比定される。第2群b類及び第3群土器、第4群土器a類～c類は、小舟渡平式(第6図5・6、第7図5～12)の範疇に入るものである。第4群d類は、田戸下層式(第6図20)に比定できる。また、第5群土器は「物見台式系統」の後半期に該当し、a・b類は第6図18に、c類は第6図19の段階にそれぞれ比定される。第6群土器は、本論では詳述していないが東北部の大寺式(第6図23)に比定される。

したがって第11層では、小舟渡平式、明神裏3式、田戸下層式、蛇王洞II式が、第9層では「物見台式系統」の後半期の土器と大寺式が出土したことになる。

(2) 岩井堂洞窟の層位的評価

岩井堂洞窟での層位的な出土状況については、今まではさほど注目されてこなかったが、これは、「吹切沢式系統」と「物見台式系統」の併行関係について重要な示唆を与えてくれるように思われる。

岩井堂洞窟第11層の共伴関係からみると、小舟渡平式と田戸下層式が併行するのは明白で、おそらく、白浜式と明神裏3式も併行するものと予測される。⁽²¹⁾また、岩井堂洞窟では、寺の沢式と吹切沢式及び第6図17の段階の土器が全く欠落しているが、このことは逆に両者が併行関係にあったことを示唆しているように思われる。おそらく、岩井堂洞窟における第10層の無遺物層期(岩盤崩落期)に、これらの土器が他の場所で連続していたものと考えられる。

岩井堂洞窟第9層では、「物見台式系統」の後半期の土器と東北部の大寺式が共伴し、両者の併行関係を示唆するが、第9層の「物見台式系統」の土器は、これに併行すると思われる東北部の土器を、竹之内遺跡(第6図22)や富作遺跡に認めることができるため、大寺式とは若干の年代差をもって考えたい。また第9層では矢羽状の貝殻腹縁圧痕文の施文された蜃沢

A II 式の破片（文献30図版19—6）がわずかに伴うが、吹切沢式は全く共伴していない。蛭沢 A II 式の共伴関係は、鶯ヶ長根IV遺跡でも認められるが、ここでも、館式と蛭沢 A II 式の土器が第6図19の段階の土器を共伴していることから、館式と蛭沢 A II 式が「物見台式系統」の後半の土器と併行関係をもつことが予測される。ただし、館式では器形において「物見台式系統」の影響を受けていることから、キャリパー形の器形をとどめる第6図18との併行関係を考えるのがより適当であろう。

第6図に示した「吹切沢式系統」と「物見台式系統」は、上下の関係をもって年代的にほぼ対応するものであり、岩井堂の層位的評価に基づいても、2系統論の方がより整合性をもっているように思われる。

(3) 東北地方貝殻沈線文土器文化と岩井堂洞窟

東北地方における貝殻沈線文土器は、押型文土器に続く沈線文土器の中から生まれ、当初、北部では「吹切沢式系統」土器が、南部では田戸下層式土器がそれぞれに変化を遂げた。やがて田戸下層式に続く明神裏3式が「物見台式系統」の祖型となるに至って北部においてもその分布を拡大し、2系統の併存という状況を生んだ。しかし、2系統間の交流が、吹切沢式以降頻繁となり、蛭沢 A II 式段階では、北部・南部に斉一性をもった土器が散見されるようになる⁽²³⁾。こうした状況は、2系統間の交流のみならず東北地方全体に及ぶ文化の動態をその背後に予測させる。そして、それ以降は、新たに鳥木沢式と大寺式という北部と南部の地域性をもつ土器が出現する。

岩井堂洞窟は、第11層の段階では、「吹切沢式系統」→「物見台式系統」という異なる系統下に入り、第9層の段階では、「物見台式系統」→東南北部系統という系統下にあったことがわかった。秋田県下にあっても最南端に位置する岩井堂洞窟は、後半においてより東南北部の影響下にあり、北部の鶯ヶ長根IV遺跡とは好対照を示している。おそらく、大木式・円筒式に象徴される地域性は、前期を遡る早期貝殻沈線文土器の終末期にはすでに顕われていた可能性がある⁽²⁴⁾。

VI おわりに

本論では、岩井堂洞窟の資料に基づき、早期貝殻沈線文土器の編年試案を提示したが、今後はこの編年に

誤りがないかを、遺跡の中でさらに検証していかねばならない。

また、山下氏による土器の評価についてはほとんど触れることができなかったが、山下氏は関連資料の少ない当時であっても広い視野と深い洞察力をもって岩井堂洞窟の位置付けにあたられており、本論はそれに立脚したに過ぎない。生涯をかけて岩井堂洞窟の調査・研究にあたられた山下氏に敬意を表したい。

本論の作成に際しては、多くの方々の御配慮をいただくこととなった。文献の収集にあたっては、恩田勇氏、栄一郎氏、高橋忠彦氏、谷地薫氏の御協力を得た。資料の実見については雄勝町教育委員会より便宜を計っていただいた。また、阿部芳郎氏、庄内昭男氏には日頃より御指導をたまわっており、本論についても多くの貴重な御助言を頂戴した。ここに記して厚く御礼申し上げる。末筆ながら、筆者が明治大学大学院在学中には、戸沢充則先生に学ぶところが大きかった。土器の型式学的研究の素地を培って下さった先生には、心より感謝申し上げます次第である。

(註)

- (1) 山下 1969, 1979
- (2) 名久井 1988
- (3) 三宅 1979
- (4) 西川 1989
- (5) 名久井 1989
- (6) 今村 1983
- (7) 名久井 1989
- (8) 江坂 1954
- (9) 江坂 1954
- (10) 名久井 1974
- (11) 名久井 1982
- (12) 名久井 1988
- (13) 三宅 1976
- (14) 名久井 1988
- (15) 根井沼式、小舟渡平式、白浜式については、設定された型式にぴったりとは符号しない点もある。
- (16) 第6図13・14は、阿部芳郎氏の御好意により本論で使わせていただくとともに御助言もいただいた。
- (17) 貝殻の截断は吹切沢式にもあることがすでに指摘されている（三宅 1976）。
- (18) 林 1962, 1982

- (19) 林 1982
 (20) この見解については山下1979と変わるところがない。
 (21) 白浜式については、資料が少なく本論では示すことができなかったが、第11層出土の貝殻条痕文の胴部破片の中には白浜式に該当するものも存在する可能性がある。
 (22) 矢羽状の貝殻腹縁圧痕文は小舟渡平式でも見られるが、蛸沢AⅡ式のそれは口縁内面にも施文され、口縁部がわずかに外反する点で明瞭に識別される。また、それに伴う刺突文も前者は爪形文か突瘤文で、後者は円形刺突文である。
 (23) 第6図19の土器は、蔦ヶ長根IV遺跡、岩井堂洞窟第9層、竹之内遺跡、富作遺跡で認められる。
 (24) 富樫氏もこの点に関してすでに指摘されている(富樫1989)。

引用・参考文献

- (1) 稲野 彰子 1989「東北地方北部の縄文時代早期貝殻文土器について」『考古学の世界』慶応義塾大学民族考古学研究室 新人物往来社
 (2) 今村 啓爾 1983「文様の割りつけと文様帯」『縄文文化の研究』5 雄山閣
 (3) 江坂 輝彌 1954「各地域の縄文土器—東北」『日本考古学講座』3
 (4) 熊谷 常正 1982「IV. 解説 1. 縄文時代草創期・早期」『岩手の土器』岩手県立博物館
 (5) 庄内 昭男 1983「貝殻文」『縄文文化の研究』5 雄山閣
 (6) 杉山 武 1980「白浜式・小舟渡平式土器にかかわる館平遺跡出土の早期貝殻文土器について」『奥南』創刊号
 (7) 芹沢 長介・林 謙作 1965「岩手県蛇王洞洞穴」『石器時代』7号
 (8) 富樫 泰時 1989「貝殻沈線文系土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
 (9) 名久井文明 1974「北日本縄文式早期編年に関する一試考」『考古学雑誌』60—3
 (10) 名久井文明 1982「貝殻文尖底土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣
 (11) 名久井文明 1988「北日本縄文式早期吹切沢式系統の後半期編年」『先史考古学研究』1
 (12) 名久井文明 1989「東北地方北部における縄文時代早期貝殻腹縁文土器の系統」『第4回縄文文化検討会シンポジウム資料』
 (13) 西川 博孝 1989「物見台」と「吹切沢」—東北・北海道南部における貝殻紋系統土器末葉の編年—『先史考古学研究』2
 (14) 林 謙作 1962「東北地方早期縄文式文化の展望」『考古学研究』9—2
 (15) 林 謙作 1965「縄文文化の発展と地域性—東北」『日本の考古学』II 河出書房
 (16) 林 謙作 1982「北海道南部、東北地方」『縄文土器大成』1 講談社
 (17) 領塚 正浩 1987「三戸式土器の再検討」『東京考古』5
 (18) 山内 清男 1964「文様帯系統論」『日本原始美術』I 講談社 (調査報告書)
 (19) 阿部 芳郎 1989『半蔵窟遺跡調査報告書』学校法人東京純心女子学園
 (20) 小笠原善範 1987『田面木平遺跡(1)』八戸市教育委員会
 (21) 庄内 昭男 1981『蔦ヶ長根IV遺跡』秋田県教育委員会
 (22) 杉山 武 1975『千歳遺跡(13)発掘調査報告書』青森県教育委員会
 (23) 長尾 正義 1987「根井沼(1)遺跡発掘調査報告書」III 三沢市教育委員会
 (24) 藤原妃敏・森 幸彦 1986『富作遺跡発掘調査概報』福島県教育委員会
 (25) 馬目 順一 1982「竹之内遺跡—縄文時代早期の調査—」いわき市教育委員会
 (26) 三浦 圭介 1973『むつ小川原開発に伴う新住区予定地内埋蔵文化財分布・試掘調査報告書』青森県教育委員会
 (27) 三宅 徹也 1976『小田野沢 下田代納屋B遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館
 (28) 三宅 徹也 1979『蛸沢遺跡』青森市蛸沢遺跡発掘調査団
 (29) 山下 孫継 1969『岩井堂岩陰遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財保護協会
 (30) 山下 孫継 1979『岩井堂洞窟 第4洞穴第8次発掘調査報告書』雄勝町教育委員会
 (31) 吉田 義・八木光則 1983『大館遺跡群 大新町遺跡』盛岡市教育委員会